

巻頭言

生きづらさのある社会の中で 人が輝きあうしごと

酒井 厚行 (センター事業団四国開発本部 本部長)

2024年6月、第13回目となる「清掃・物流・緑化全国よい仕事コンテスト」が日本労働者協同組合連合会主催により開催され、物流業務を担う多賀城八幡事業所が最優秀現場として優勝旗を受け取った。「コンテスト」と聞くと、清掃や物流、緑化の技術を競い合う場を想像されるかもしれないが、このコンテストは単なる技術の競い合いではない。2005年に「新清掃・守本方式交流集会」として始まり、主眼は「働く一人ひとりの成長」に置かれてきた。職場づくり、そこで働く人々、利用者、地域の人々、そして地球環境にまで思いを広げた「よい仕事」の発信の場であると同時に学び合う場として位置づけ、組合員とともに成長してきた。

今回の特集テーマである「清掃」に焦点を当て、この仕事を持つ「よい仕事」とは何かを考えてみたい。私たちが大切にしてきたのは、「捨てるごみの向こうに人がいる」という思想と、「埃を科学する」という実践である。そして、最も重要だったのは、人間関係、特に組合員同士のつながりだ。この点を顕著に示しているのが、働きにくさを抱える人々と共に働く実践である。

例えば小豆沢事業所のソーシャルファームの認定や、高知事業所の中間的

就労事業所としての認定を受け、働きにくさのある方を受入れている実践が語られるなど、今回のコンテストでも数多くの事業所において「ともに働く」ことを現場運営の中心に据えた発言が占めていた。しかし、その現場での実践は日々、試行錯誤の連続である。若者を受け入れるにあたって、様々な不安を感じている仲間との話し合いを通じて合意を得ることから始まる。「若者が清掃で食べていけるのか？すぐに辞めてしまうのではないか」といった不安や、「挨拶ができないのであれば、病院から何か指摘を受けるのではないか」という不安の声が挙がる。実際に受け入れが始まると、挨拶ができない、返事をしないとといった場面に直面することになる。なかなか気持ちが伝わらず、心が折れそうになりながらも、時間をかけて根気よく向き合うことで、やがて「おはようございます」と小さな声で言えるようになり、その瞬間を皆で喜び合うのだ。このような変化は、現場の責任者一人では成し遂げられない。責任者と他の組合員との信頼関係、そして丁寧な話し合いがあってこそ、職場に心理的安全性が生まれ、その中で若者は見守られ、成長することができたのだと思う。また、「職場」とは清掃現場だけを

指すのではなく、理解をもって見守ってくれる委託元である病院の存在も重要な要素となっている。

「就労支援はセンター事業団が果たすべき役割だ」——そう語った組合員がいた。労働者協同組合の歴史を振り返るとその根底には失業対策の事業があり、今もなお失業者や働きにくさを抱える人々が集まっている。だからこそ、人一倍「働けないことの痛み」に敏感であり、排除することなく、知恵を出し合いながら受け入れる道を模索し続けてきているのである。結果として、障がい者、若者、高齢者、ひとり親、外国籍の方々など、多様な背景を持つ人々が共に働く場が形成されている。清掃現場は、多様な人々が集い、それぞれの個性が結びつく場所になっている。この中で、働く者同士の本物の人間関係を築いていくことこそ、協同労働の清掃現場の醍醐味ではないだろうか。

また、職場での信頼関係が強固なほど、視点を地域に向けることが可能になる。かつては病院清掃の仲間が全国各地でヘルパー講座を開講し、地域福祉事業所を立ち上げてきた。その他にも、退院後の患者の自宅での生活の必要性に応え、ハウスクリーニングや「ゴミ屋敷」の片づけ、「みんなの居場所」づくりなど、地域とつながる実践を繰り返してきた。とかく内向的になりがちな清掃現場において、コンテストで語られる「地域に向か

う実践」は刺激以外の何物でもない。「あの現場がやっているなら、私たちもやってみよう」というライバル心を持ちながらも、学ぶ姿勢は忘れない。コンテストを通じて、利他の精神を基礎に互いを切磋琢磨し高めあっている現状がある。今、全国的には組合員の高齢化が課題とされている。病院清掃で働けなくなった時の居場所をどう作るか、シニアワークスを地域の中で新たな仲間を集めて作ることができるか、これからの大きなテーマである。

さらに、未だに社会的に低く見られがちな清掃の仕事の評価をどう高めるかという課題がある。「誰でもできる」と思われがちな清掃の仕事だが、実際には日々の清掃業務を行うだけでなく、備品管理、発注、経営状態の把握、採用・研修、委託元との協議など、様々な内容の業務を行っている。決して簡単な仕事ではない。一人ひとりの得意・不得意を抱えつつも、仲間と協同してこれらの仕事を成し遂げてきたからこそ、仕事に誇りを持ち、働くことに喜びを感じることができるのだと思う。この価値をもっと社会に発信していく必要がある。今後のコンテストを、さらに公に向けたものとして発信し、これまでの現場の実践を記録としてまとめ、社会に伝えていくことはできないだろうか。常に挑戦し続け、この社会における清掃の仕事の価値を高めていきたい。